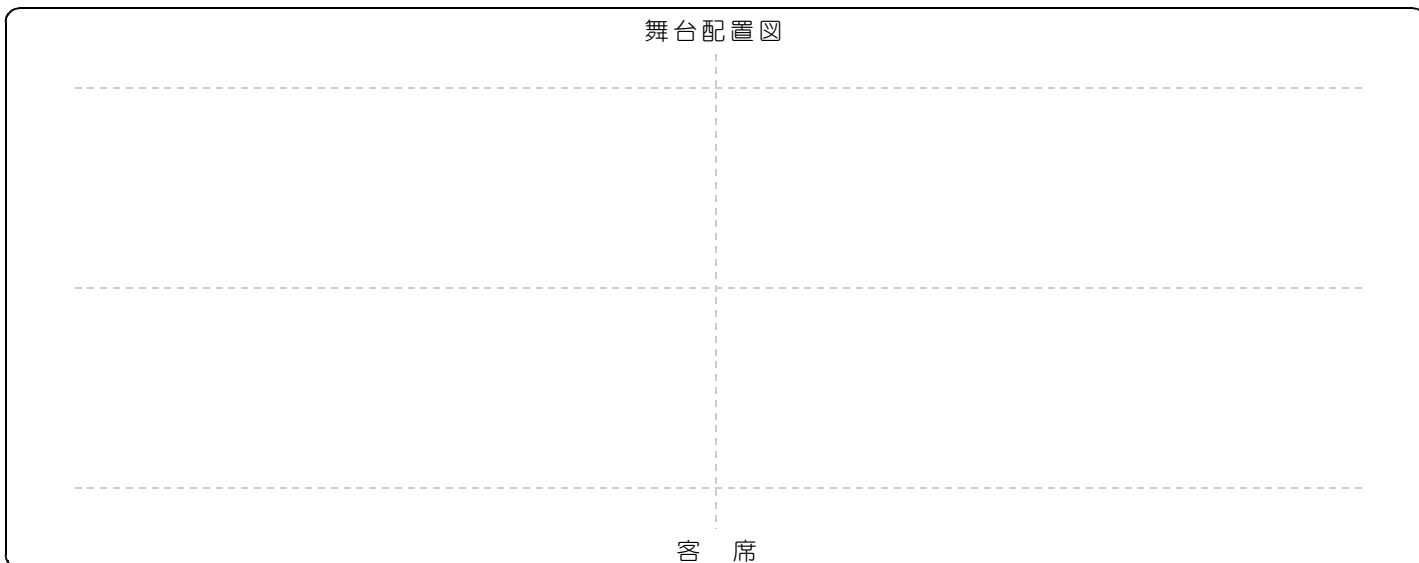


No.	<b>火 垂 る II</b>	演奏者数	演奏時間
-----	-----------------	------	------

舞台配置図



客 席

表示記号一覧	一 箏	= 17絃	+ 三絃	0 尺八	≠ 他楽器	* マイク	□ モニター	□ 毛氈	W 屏風
立 奏	立奏台	大 台	小 台	椅子	大 台	小 台	譜面台	台	ハイター 枚
座 奏	琴台	台	見台	台	山台	録音 有：無	録画 有：無	他	
始	緞帳：暗転	板付	毛氈 緋：紺	音響					
終	緞帳：暗転	板付	屏風 金：銀	照明					

<b>調絃表</b>	ピッチ A=44		編成：箏										
Part	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	斗	為	巾
箏				C#					C#			B	F#
	C#	G°	G#°	C°	D°	F#°	G°	G#°	C°	D°	F	G#	C

編成欄には面数を記入 開始調絃は太字 転調は上下の欄 ハーモニックスは右肩に○

作曲年 1980年 委嘱者 石垣清美 構成 箏独奏 時間 11分 出版楽譜 無し

解説 何年か前、私は野坂昭如氏の「火垂るの墓」という小節に接した。物語は、終戦の年に栄養失調で死んだ当時中学三年の浮浪児と、その妹の死までを氏の原体験をもとに描かれた短編で、「空襲の焔に焼かれ、幼い妹と二人防空壕の横穴で、灯りがわりに蛍を捕まえて蚊帳に入れ、かろうじて生きて行く生活。次第に痩せおとろえ、やがて死ぬ妹。彼は妹の屍体を焼くが、火が燃え尽きたとき、まわりに夥しい蛍が群れる。そして彼は妹がこの蛍と一緒に天国へのぼるのだと思う。」というのがこの物語のあらすじだが、私は氏の独特の文体と、そこにあるおぞましい程の情景の中に流れる一筋の美しさに、突き上げる様な感動を覚え、いつかこの“火垂る”という題を自分の作品の上に置きたいと思っていた。此の度の“火垂る～II～（箏独奏の為に）”は、作曲中前作の十七弦の為に書いた“火垂る”の余韻が私の裡から終始離れず、その為同じタイトルを付けるにいたった。この二つの作品は物語のあらすじとは切り離れたもので、私の感知の流露としての覚え書きであることを記しておく。1980年3月作曲。[作曲者]

収録媒体 日本音楽の巨匠 現代箏曲一 沢井忠夫 (VZCG-507)

箏 沢井忠夫作品集4 (VZCG-581)